

埼玉県の腸管出血性大腸菌検出状況（2006）

埼玉県で2006年に分離され衛生研究所で確認された3類感染症である腸管出血性大腸菌は、101株でした。分離株の血清型は例年通りO157:H7が66株と最も多く、ついでO111:H-が19株、O157:H-が7株、O26:H11が6株でした。また、その他の血清型ではO103:HUTとO165:H-がそれぞれ1株分離されています。O157:H7の毒素型別ではVT1&2産生株が31株、VT2産生株が35株でした。届け出時の成績ではVT1あるいはVT2単独産生性であったものが、その後の詳細な検討によりVT1&2両毒素の産生性が確認された例が数例ありました。

分離された腸管出血性大腸菌の血清型と毒素型(2006)

血清型	毒素型	検出数
O157:H7	VT1&2	31
O157:H7	VT2	35
O157:H-	VT1&2	6
O157:H-	VT2	1
O26:H11	VT1	6
O26:H-	VT1&2	1
O111:H-	VT1	3
O111:H-	VT1&2	16
O103:HUT	VT1	1
O165:H-	VT2	1
合計		101

PFGE法を用いたDNA切断パターンによる型別では、O157:H7 (VT1&2) 31株が10パターン、O157:H7 (VT2) 35株が20パターンに型別されました。複数の株が同一のパターンを示し、集積性が認められ、共通の感染源が示唆された例が家族内感染例以外にもありましたが、原因の究明には至りませんでした。これらの集積性のあるパターン以外にも県全体では多様なパターンが存在することから、複数の感染源の存在が示唆され、今後とも注意する必要があると考えられました。

今後とも原因究明調査等へのご協力をお願いします。